【事例報告】福岡アジア美術館のボランティア活動について

講師 福岡アジア美術館 学芸課交流係

蒲池 昌江氏

福岡アジア美術館の蒲池と申します。私は美術館の学芸課交流係というところで、ボランティア運営をしている立場からお話をさせていただきます。

福岡アジア美術館は福岡市立の美術館で、福岡市美術館と福岡市博物館、そしてこのアジア美術館と、福岡市に3つある公立の博物館施設の1つです。ニックネームは“アジ美”っていますが、まず、アジ美の特徴をお話いたします。

今からお話をしていきますが、今日の資料について、お手元に事例報告の概要があると思いますが、特にレジュメなどをご用意しておりませんので、皆さんこちらのプロジェクターの方をご覧ください。

アジア美術館の一番の特徴として、アジアの近現代美術、近代美術と現代美術を専門に紹介する美術館です。時代的には19世紀以降から現在まで。そしてアジアの古いものとして、それ以前の古美術などは福岡市美術館のほうが扱っております。地域的に言いますと、アジアの21カ国・地域を収集していきまして、貯蔵作品は約2700点あります。一番西側がパキスタン。そして北側がモンゴル。そして南がインドネシア。そして一番東が日本ということになります。21カ国・地域というふうに申し上げましたのは、台湾が含まれています。台湾は地域という言い方をしておりますので、アジア美術館では「アジア21カ国・地域」というふうな言い方をしております。

具体的にはどのような作品かといいますと、絵画ですとか彫刻、そしてインスタレーションというオブジェを空間の中に設置して空間自体をひとつの作品とするという、日本語でいうと、仮設的空間造形といいます。インスタレーションというジャンルの作品です。このほかにメディアアート、ビデオなどの映像を使った作品、そして最後に民俗芸術、これは他の美術館には無い特徴的なものだと思います。これまで美術とみなされてこなかったようなアジア各地の民俗的な、今、見ていただいているのはバングラデシュで実際に街の中を走っている“リキシャ”という乗り物です。これも美術的に価値があるということで、アジア美術館では所蔵をしています。

あともう一つ、大きな美術館の特徴があります。それはアジアの美術交流事業というのをやっております。具体的にどういうものかと申しますと、アジアのいろんな国や地域からアーティストや研究者を招待して美術館に長期滞在をしてもらい、作品を作ってもらったり、アジア美術の研究をしてもらっております。その滞在の過程を通じてワークショップを行ったり美術講座を開いたり、パフォーマンスやイベントを行っていくという、そういった活動を美術交流事業と言っていますが、これは他の美術館では見られない活動かなと思います。

そして今年が一番大きな展覧会としては、11月30日まで行っておりました、一番力を入れている展覧会のひとつと言えますが、アジアの現代美術の国際展「福岡アジア美術トリエンナーレ」というのがあります。

今回、第5回目ということで9月6日から11月30日まで約3ヵ月間おこないました。36組の出品作家、特別部門で別に10組いますが、36組の中でそのうち20組のアーティストが福岡に滞在して滞在制作などを行って参りました。

こういった美術館の活動を支えていただいているのが、ボランティアの方々です。

これからはアジア美術館のボランティア活動について具体的にお話を進めてまいります。

古い話になりますが、アジア美術館が開館したのが1999年、今から15年前、今年で開館15周年ということになります。先ほど紹介した展覧会は、開館記念展でした。開館日は博多リバレインの開業に合わせて3月6日に開館しました。「博多リバレイン」とは、「博多座」や「ホテルオークラ」、そして「福岡アジア美術館」3つを含めて「博多リバレイン」と言いますが、その博多リバレインの開業日である3月6日に開館いたしました。

ボランティアの皆さんも開館と一緒に誕生しました。人数は、534人と本当に多い人数ですが、開館1年前に福岡市美術館にあった開館準備室で説明会を開催し、説明会に集まってくくださった方がなんと830人、とても美術館の講堂に入りきれずに数回にわけて説明会を行いました。最高齢の方が91歳でいらっしゃいましたが、そこで半年間の研修を受けてボランティアになっていただきました。当時のことを振り返るとやはり阪神淡路大震災が90年代にあり、その後ということで、ボランティアやボランティア活動が非常に注目され、そのブームとは言いませんがボランティア活動に大きく注目が集まり、皆さんの関心も高かったものと思います。

あともう一つは、福岡市にできる新しい美術館への期待ということもあったと思います。その後、アジア美術館は2008年と2012年に再募集をしていますが、定期募集というのは行っていませんので、人数が少なくなってきたところで募集をするというやり方です。そのため長い方は、本当に15年間ずっとボランティアをやっている方がいます。

美術館でのボランティアの目的としては、アジア美術館の美術館活動を支援することで社会貢献に務めていただくことを目的としています。美術館は社会教育施設ですので、来館者サービスに務めるということ、それが主な目的になりますが、それプラス、美術館が持っている機能ということで研究活動の支援もしていただいております。

次にボランティアの応募資格ですが、二十歳以上の方で上限はありません。

活動の条件としては、月に2回以上活動していただけること、あと毎回2時間以上活動できることを条件にしています。先ほど申し上げたように任期はありません。そして報酬もなし、交通費等の支払い、昼食などの提供もしていません。

最後に保険ですが、美術館でボランティア保険に加入しております。こういった条件にも関わらず大変熱心に活動をしていただいております。

次に組織的なこととお話しますと、今8つのグループに別れて活動しています。お手元の概要にも文章で書いてありますが、これから順にお話をいたしますが、最後の「交流ボランティア」には、全員が属しております。人数は、今年の4月現在で248人の方が活動をしておられます。美術館でこれまで2回再募集をしたと申しましたが、以前は、並列した8つの活動グループでしたが、幾つか纏めたり分けたり組織改変で、例えば情報ネットボランティアの活動が「活動支援ボランティア」に分かれたり、あと「読み聞かせボランティア」というのが今度の再募集で新たに加わったりして、現在の8つのグループになっております。

各グループの活動についてお話をします。

まず一つは「案内解説ボランティア」

これは美術館のコレクションの解説をしていただくこと、館内の施設案内などもしていただいております。開館日の毎日午後1時から4時まで二人以上コレクション室の前に待機

していただき、ギャラリーの中を回っていただきながらご案内をしていただいています。対象がアジアの美術ということで、日頃親しみの無いお客様が多いことと、現代美術という非常に取っ付きにくいと言われる分野ですので、ここは学芸員が難しい話をするのではなく、ボランティアの方々がお客さんに近い目線で作品について語っていただくことが大切かなと考えております。

そして、トリエンナーレの開催中はこれまで国際展に団体の見学が非常に多かったのですが、団体見学に限って案内をしていただきましたが、今年はボランティアさんから、「もっと案内がしたい」という申し出があったことから、各自で時間が取れる時に自由に入り口のところに待機をしていただき、作品について話をさせていただきました。

二番目が「図書資料ボランティア」

こちらは美術館の図書資料の整理をしていただいています。当初は、ばらばらに好きな時間帯に来ていただいていたのですが、「他のボランティアの方と一緒に活動がしたい」という希望があって日程を決めて、10日とか20日とか、一緒に活動できる時間をゆるやかに設けています。それ以外は随時活動をしていただいています。トリエンナーレの期間中には、これもボランティアさんのアイデア、企画で「トリエンナーレでどういう活動ができるのか」という話し合いを通して、美術館の中にある図書閲覧室を利用するお客さんのために、沢山の資料など情報を用意していただきました。

三つ目が「学芸資料ボランティア」

これは新聞などに掲載された美術館の情報を、切り抜き・スクラップをしていただくということ。その外、美術館にはアジアの作家ファイルなどが沢山ありますので、それも整理をしていただいています。また今回のトリエンナーレでは、資料室で新聞のスクラップをする中で「他のボランティアにお勧めの記事」というのを新たに選び出し、美術館の中にあるボランティア室に貼り出して皆さんにPRしていただきました。

四つ目が「展覧会情報ボランティア」

これは美術館にたくさん送られてくる先ほど皆さんに紹介したチラシとか、ハガキそういったもの、あと雑誌の掲載記事などの整理をしていただく活動になります。ばらばらに整理をしても効率が悪いので、月に第一、第三木曜日、第二、第四土曜日というように活動日を決めて活動をしていただいています。今回のトリエンナーレでは、そういった情報を活かして美術館の中にある彫刻ラウンジに、左右2台情報掲示板みたいなボードを作っただけで、遠く県外からいらっしゃるお客様も多いので、来館者むけに福岡市内近郊のお勧めレストランとか、あとは美術情報のチラシなどを並べて掲示していました。

五つ目が「広報ボランティア」

これは美術館の広報誌「あじびニュース」や、ポスターやチラシの発送作業をしていただいています。この写真は、ほんとに膨大な量の発送物を送っていただいている様子です。

六つ目、これは今回、再募集で新たにできた「読み聞かせボランティア」です。美術館の中にキッズコーナーという所があり、子どもさんに遊んでいただくスペースですが、子ども、「アジアの絵本や紙芝居などを読み聞かせをしたい」という、ボランティアさんからあがった声で、イベントの時や展覧会にあわせて読み聞かせを行っています。

七つ目が「交流ボランティア」

これは美術館の特徴的な交流事業をサポートしていただく活動で、ボランティア全員が所

属をしております。今回のトリエンナーレで展示した非常に大きい2メートルぐらいある大きな馬の布製のオブジェを組み立てたり縫ったりするような作業を、交流ボランティアの中から募って、作業をしてもらいました。

この他、美術館と地域が協力して行っている“リバレイン灯明”という灯明祭りがありますが、これは毎年アジア美術館のアーティストが図柄をデザインすることになっており、交流ボランティアの方たちがその設置まで一緒にやっています。今回はブータンのアーティストがやってくれたので、ブータンの守り神のガルータがデザインされ、それをボランティアの皆さんと一緒に設置をしました。

最後の「活動支援ボランティア」

これは他の美術館ではあまり見られない活動ではないかと思えます。

美術館には200人を超えるボランティアの方々がいらっしゃいますので、横のつながりを作るという目的で発足したボランティアです。ボランティア通信、今はブログになりましたが、その発行とか、他にボランティアへのメール発信、ボランティア研修の企画、研修旅行、親睦会、連絡当番ミーティングなどの企画をして、日頃のボランティア活動のサポートをする活動になります。

これはボランティア活動の課題でもありますが、「これだけの人数がいて一緒に何年も活動をしているのに、活動をしている人のことがわかりません」という声が上がりました。そういったことを無くしていくために、2年前に再募集したときから活動支援ボランティアが中心となり「連絡当番ミーティング」という会合を開いています。

「連絡当番ミーティング」というのは、アジア美術館では『ボランティアの代表者』を置かない方針でやっていますので、今ご紹介した8つのグループそれぞれで連絡当番を持ち回りで出し、その月の連絡当番になった人たちが集まって、「今こういった活動をしていますよ」という活動報告、あと相談事などもこの連絡当番ミーティングの場で話し合われるということになっています。

その他にはボランティア研修会、もちろん展覧会の内容に関する研修などは学芸員がおこなうことが多いのですが、ボランティア研修とは、「ボランティア活動についての研修を自分達でしたい」という声もあり、新規のボランティアが加わった際に「ボランティア活動を長く楽しく続けるにはどうしたらいいか」というざっくばらんなトーク形式の研修を活動支援ボランティアでやっていただきました。

その他には、他館のボランティアの方たちが美術館にきてくださる時の交流会なども活動支援ボランティアでやっていただいております。また滞在アーティスト、先ほどの大きな馬を作ったミャンマーのアーティストを迎えるにあたって、手作りの歓迎パーティーを企画するなど、持ち寄りの手作りの歓迎会をいつもやっていただいております。

アーティストはこういう温かい歓迎会をして貰うとすごく感激して、あとで感想を聞いたら特に印象に残ったことのひとつとして必ずとっていいほど「ボランティアの方にとっても暖かく迎えていただいた」というのをいってくれています。

最後に、「ボランティア活動をより活かすには！」についてです。

これは「メンバー同士のコミュニケーションが大事である」と思えます。

ボランティア活動で「自己実現をしていく」ということも、もちろんそうですけれども、そのボランティア組織を運営していく立場として非常に大切に思っているのは、メンバーの方一人一人のコミュニケーションが大事であるということ。そしてあともう一つは、施設の担当者、運営者とのコミュニケーションが円滑でなくてはいけないと思えます。

これはこれまでにでてきたお話で、ボランティアの方から「学芸員の人たちには、ちょっと話しにくい」ですとか、「忙しそうなので話しかけづらい」という声が上がったので、現在では、各グループに一人ずつ、学芸課の職員を担当者でつけています。

次にボランティアさんの「モチベーションを高める工夫」、これは一口に言ってもさまざまだと思いますし、個人々々がそれぞれ既にモチベーションをもって参加をされていると思うのでそれをいかに高めていくかということが、その美術館のボランティアを運営していく中で非常に大きな課題だと考えます。先ほどもお話した活動支援の方々の活動というのもモチベーションを高める工夫のひとつですし、あとはやはり「楽しみながら活動をしなければ何にもならないのではないか」というふうに思っています。

これからも、いつも心のどこかにこれらを留めながら、私も運営者も一緒に活動をしていくという気持ちで日々運営を続けていきたいと思っています。

これで、アジア美術館の活動報告を終了したいと思います。ありがとうございました。